

---

# 燃えよバレンタイン

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

燃えよバレンタイン

### 【Nコード】

N9163Q

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ひよんなことから剣道の全国大会で優勝した雅と勝負をするこ  
とになった猛。しかし雅はあまりにも強い。だがその彼女から何と  
か一本取ると。和風バレンタインです。

## 第一章

燃えよバレンタイン

凄神猛の家は剣道の道場だ。それもかなり歴史が古い。

「直心影流っていうと」

「そうだ。あの薪割り剣法だ」

厳しい髭の大男に言われたのは子供の頃だった。彼の父に言われたのだ。

「鬼の如く重い木刀を何千本も振る剣術よ」

「そんなの僕できないよ」

すぐにこう言った幼い時の猛だった。

「力ないから」

「誰でも最初はない」

これが父の言葉だった。その木の道場の中でだ。父子は剣道着で向かい合っていた。正座をしてそのうえで、である。

「しかしだ。鍛錬によつてだ」

「なるつていうの？」

「そうだ、なる」

父はこう我が子に告げた。

「わかったな。それでは今日よりだ」

こうしてだった。彼は強引に道場の跡を継ぐ為に修業をはじめさせられた。しかしそれは一人ではなかった。

「えっ、雅も？」

「そうよ」

彼より少し背の高い女の子が隣にいた。黒髪で凜とした顔の女の子であった。その娘も剣道着である。名前を古賀雅という。

「私だつてこの道場に通つてるからね」

「それでつて」

「何よ、文句ある？」

雅はその顔をずい、と前に出して猛に言ってきた。

「それで」

「そ、それは」

「それじゃあいいわね」

「うん、じゃあ」

こうしてであった。二人は共に修業をすることになった。それから十年経った。猛は高校三年になった。その時の彼はというと。

「なあ凄神」

「何だよ」

急にだ。クラスメイトの一人に声をかけられたのであった。場所は教室、それも彼が自分の席に座っているとであった。その時に声をかけられたのである。

「御前最近どうだよ」

「最近つて」

「大学決まったんだよな」

クラスメイトはこのことから話すのだった。

「エスカレーターでだろ」

「うん、八条大学に」

そこにだというのであった。彼はその大学の系列の高校に通っているのだ。三年生なので受験も関わっていたのだ。それはもうクリアーされていたのだ。

「そこにね」

「まあ俺もだけれどな」

「だろ？何でそんなこと聞くのかな」

「確かめたいことがあってな」

それでだというのであった。

「それでな」

「うん、それで？」

「御前大学でも剣道部か」

「そのつもりだけれど」

実は彼は高校、いや中学の頃から剣道部であった。その腕はかなりのもので全国大会でもいいところをいつている。そこまでの腕なのだ。

「それはね」

「そうか。御前その外見でも強いしな」

見れば背はかるうじて一七〇を超えた位で細い身体をしている。

それだけ見るととても剣道で全国大会までいったとは思えないものだった。しかしなのだった。

「握力も腕力も凄いしな」

「そんなに凄いかな」

「ついでに言えば足腰も背筋も腹筋もな」

要するに筋肉全体がかなり凄いのである。

「やっぱりあれか」

「ううん、素振りのお陰かな」

「あの馬鹿でかい木刀振ってるからかよ」

彼の使っている木刀は特別製であった。何キロもあるうかという代物なのだ。それを一日千本近く振っているのである。それが彼の日課であった。

「それでか」

「あの木刀はね」

「御前の家の木刀だよな」

「うん、直心影流のね」

その流派の名前をクラスメイトに話した。

## 第二章

「そこ、継げって言われてるから」

「大変だな、あんなの毎日振るつてな」

「まあその結果全国大会にもいけたしね」

それ自体はいいというのだった。

「最初はかなり苦労したけれどね」

「けれどそのお陰で力も強くなっただよな」

「そうなるよね、やっぱり」

「あいつはもつとそうだったしな」

ここでだ。もう一人の名前が出て来たのであった。

「古賀はな」

「雅のこと？」

「あいつは御前よりまだ強いだろ」

こう猛に言うのであった。

「全国大会優勝だしな」

「強いよねえ」

「鬼百合だったよな、仇名」

これまた随分とありきたりだがそれでいて物凄い仇名であった。

「とんでもない仇名だよな、考えてみれば」

「誰がつけたのかな」

「それもわからないしな。それでその古賀だけれどな」

「うん、雅だね」

「あいつもだろ。八条大学に進学するんだったよな」

「うん、そうだよ」

猛は素っ気無い感じでそうだとしたのであった。クラスメイトは最初は立っていたが何時の間にか自分の椅子を持って来てそこに座って彼と話をしている。

「それで剣道部に入るんだって」

「あいつ滅茶苦茶強いからな」  
「クラスメイトは少し呆れたようにしてこう言うのだった。」  
「いや、呆れる位にな」  
「実際呆れてない？」  
「御前よりまだ強いだろ」  
「ずっとね」  
「猛はその実力をだ。はっきりと認めていた。」  
「一度も勝ったことないから」  
「そこまでかよ」  
「うん、握力とかも凄いから」  
「えげつない奴だな。顔もスタイルもいいっていうのによ」  
「女の子が聞くと喜ぶような言葉も出て来た。」  
「それでも。中身はかよ」  
「気も強いしね」  
「だよなあ。しかし御前あいつと幼馴染だったよな」  
「実は従姉弟同士なんだ」  
「血縁関係であるというのだ。」  
「親父の妹さんの子供でさ」  
「全然似てないな」  
「僕は母親似で雅は向こうのお袋さんに似てるんだ」  
「つまり御前の叔母さんにかよ」  
「うん、そうなんだ」  
「顔立ちの話もここでされた。」  
「それでなんだよ」  
「何かとややこしい関係だな」  
「もう物心ついたらいつも一緒で」  
「そんな関係だというのである。」  
「道場で一緒だよ。いつもね」  
「部活でも道場でもか」  
「そうなんだ。子供の頃はよくいじめられて泣かされたよ」

「その光景滅茶苦茶簡単に頭の中に浮かぶぞ」

クラスメイトは真顔で猛に告げた。

「そうか、ずっとか」

「本当に幼稚園からずっと一緒に」

「夫婦みたいってか」

「だから何でそうなるんだよ」

夫婦と言われてだ。猛は困った顔になって言葉を返した。

「そういうのじゃないから」

「何だ、違うのかよ」

「違うよ、僕達そんな関係じゃないから」

それを否定するとだった。ここぞだ。

「猛、いるかしら」

「あっ」

「噂をすればだな」

背は一七〇位、長い黒髪を後ろで束ねた少女がやって来た。制服から見える白い脚が黒のソックスをよく映えさせている。胸もかなり目立つ。凜とした顔をしていてそこには中性的なものがある。だが少女に相応しい初々しさも見せている。そんな少女であった。

### 第三章

少女はだ。猛を見つけるとだ。すぐに彼のところに来てこう言うてきたのだった。

「これから毎日だけれどね」

「毎日!？」

「特訓よ」

いきなりこう告げるのであった。ぶしつけにだ。

「いいわね、剣道のね」

「あの、特訓って」

「私から一本取ること」

冷徹なまでにはつきりとした言葉であった。

「わかったわね」

「一本って」

「一本取れたらよし」

雅はさらに言う。

「一本取れなかったら」

「その時は？」

「取れるまでやるから」

席に座ったままの猛を見下ろしてだ。そのうえで告げるのだった。

「わかったわね。道場でも部活でもね」

「あの、部活って」

「大学進学が決まったから問題ないから」

引退したということはどうでもいいというのであった。とにかく部活でもというのだ。雅の言葉はかなり強引なものであった。

「それでいいわね」

「断る権利は？」

「ないから」

これまた一言であった。

「そういうことだから。今日から早速ね」

「あの、ちょっと」

猛が呼び止めるのも聞かずにだ。雅はそこまで言うとは足早にその場を去るのだった。彼女のクラスは彼とは別のクラスなのだ。

残された猛は呆然となった。そのうえでこうクラスメイトに言う。彼は二人の話を聞いているだけだった。その彼に対してであった。

「あの、聞いたよね」

「また無茶苦茶言ってるな」

「雅から一本って」

「御前道場の跡継ぎで全国大会でもいいとこいったら」

「雅は優勝だよ」

言うのはこのことだった。

「それもぶつちぎりの」

「強いが」

「直心影流の方も免許皆伝近いつて言われてるし」

「跡継ぎの御前はとうなんだよ」

「まだそこまでは」

いっていないというのである。己の實力はわきまえていた。

「けれど。一本ね」

「取れるか？」

「このままだと無理だね」

ここでも己の實力をわきまえて話す彼だった。

「さて、それじゃあ」

「自分で特訓するか」

「僕だって剣道やってるし」

「負けるのは嫌か」

「やっぱりね。ちょっとやってみるよ」

こうしてであった。猛は雅から一本取ることになった。それが決まった時だ。このクラスメイトはぼつりと呟いた。

「そういえばそろそろバレンタインか。あの二人どうなんだろうな」

何気にだがこんなことを呟く。だが今の猛はそんなことは忘れて修業に専念しそのうえで雅に向かう。しかしであった。

「お、おい」

「古賀先輩強過ぎ」

「あの凄神先輩が手も足も出ないって」

「まさかあれ程までなんて」

後輩達が呆然としていた。部活の道場での戦いは一方的であった。白い道着に黒い袴が雅だ。それに対して猛は紺色である。それですぐにわかるが紺色の方は本当に手も足もであった。

「凄神先輩だつてな」

「ああ、怪力で俊敏で」

「全国大会でもいいところいつてる人なのに」

「何で勝てないんだよ」

「強過ぎるだろ、あれは」

「古賀先輩つて」

猛は完膚なきまでに叩きのめされた。そしてそれは道場でもだった。

彼の父がだ。二人の勝負を見て言うのだった。

「猛もだ」

「ですよ。免許皆伝見えてますよね」

「あの人も」

「けれど雅ちゃんは」

「何ですか、あれは」

猛の父も含めて道場の面々もだ。あまりにも一方的にやられる猛と圧倒的な強さを見せる雅にだ。啞然となってしまっていた。

## 第四章

とにかく猛は一本も取れない。雅にやられっぱなしだ。それを見て猛の父は言うのであった。

「言うには言ったが」

「あのことですか」

「それですか」

「猛だけでは駄目だ」

父は周りに話すのだった。

「だから。あ奴とな」

「雅ちゃんをです」

「というか雅ちゃんの相手こそですね」

「この道場を」

「しかしあれではな」

父は一方的にやられ続ける我が子を見てまた言う。

「どうしようもない」

「全くですね」

「それは」

「そうだ、考えておくか」

こんな話もしていた。とにかく猛は来る日も来る日も負け続けた。だがそれでも彼はだ。諦めずにこんなことを言っていた。

「とにかくな」

「御前もへこたれないな」

「だから剣道やってるから」

それで負ける訳にはいかないとだ。クラスメイトに話すのだった。

「絶対に一本は」

「御前のその怪力でも駄目か」

「力は雅の方が強いし」

「そこまでいったら人間じゃないな」

雅のことに他ならない。

「古賀の力は」

「直心影流だからね」

また流派の話になる。

「薪割り剣法だから」

「ああ、確か御前の流派って真剣も使うよな」

「うん、結構使うよ」

直心影流の特徴の一つだ。重い木刀で鍛錬するだけでなく。真剣で竹を斬ってだ。そこから実際の剣道を学ぶこともしているのである。

「僕だって何度も」

「古賀もだよな」

「いや、そっちはね」

真剣の方の話をするのであった。

「僕の方が得意なんだ」

「刀を使うとか」

「うん、そういうことは」

「何でなんだ？」

クラスメイトはここで彼に問うた。

「何であいつ真剣は苦手なんだ？」

「何でって？」

「あいつの方が圧倒的に強いんだよな」

このことをここでも言う彼だった。

「それで何で真剣だけなんだよ」

「雅は真剣怖がるんだよ」

「それでか」

「ああ、人を斬るのはどうかって言ってさ」

それでだというのである。

「木刀は平気なんだけれどな。包丁もな」

「それでも真剣はか」

「だからそつちは僕の方が得意なんだ」

「そうか。それならな」

「それなら？」

「あれだよ。御前もう真剣持ったつもりでいけよ」

クラスメイトはこう彼にアドバイスするのであった。

「それで古賀をな」

「雅を？」

「斬るつもりでいけよ」

これが彼のアドバイスであった。

「もうな。普通にやっても手も足も出ないんだよ」

「うん、全く」

「じゃあ斬れ」

アドバイスのその言葉が強いものになった。

「一気にな。斬っちまえよ」

「真剣じゃないよね」

「真剣で斬ったら死ぬだろ」

ここで言葉に少しぼけが入ってしまった。

「だからだよ。そのつもりでいけてことだよ」

「そうだね。じゃあ」

「そつしたら一本位は取れるだろ」

「そつえば」

猛はここで己のこれまでの雅との勝負を思い出して述べた。

## 第五章

「雅には一本取ってやるって思ってたけれど」

「斬るっていうのは考えなかったんだな」

「全然ね」

その通りだというのである。

「じゃあここは気持ちを切り替えてね」

「ああ、あいつを斬る気だな」

「いってみるよ」

「そういうことだな。それでだけれどな」

ここまで話してだ。クラスメイトは話を変えてきた。

「もう二月だけれどな」

「うん、中頃だね」

「御前あれはどうなんだよ」

こう猛に言うのだった。

「チヨコレートはな。どうなんだよ」

「チヨコレートって？」

これまでで最もきよとんとした返事だった。

「何？」

「だから二月なんだぞ」

「うん、受験も無事パスしたしね」

こんな返答を出す猛だった。

「よかったね。本当にほっとしてるよ」

「御前今の言葉本気で言っているんだよな」

クラスメイトは呆れながら彼に言葉を返した。

「今の言葉な」

「うん、後は雅に何とか勝ってというか一本取ってね」

「御前今そのことしか頭にないんだな」

「ちよっとね。そうなんだ」

真面目な顔で答える。本当にそれしかないというのがよくわかる。

「うん、絶対にだよ。斬るってつもりで」

「ああ、頑張ってくれ」

クラスメイトの返答はかなり投げやりなものになっていた。

「もうな。一本取ってくれよ」

「わかったよ。僕頑張るよ」

「ったくよ、古賀もよ」

クラスメイトはわかっていた。それで今ぼやくのであった。

「回りくどいことするよな」

「回りくどいって?」

「いや、何でもない」

言ってもわからないと見てだ。彼は今ここで猛に話すことは諦めたのだ。放棄してしまったと言っこともできる。とにかく諦めたのだ。

「気にするな。勝負頑張れよ」

「よし、今日こそ」

こうしてだった。彼は雅との勝負に思いを馳せるのだった。そしてだ。

部活ではだ。やはり負けっぱなしだった。しかしである。

「そうか。雅の動きは」

負け続けているうちにだ。彼女の動きがわかってきたのだ。

彼女の動きは直線的なのだ。その剣もだ。一本気な彼女の性格がそのまま出ている。剣道の動きもそうなのである。

もっともこれは猛でもある。直心影流はそうした剣術だからだ。

それだった。彼はだ。雅の動きを頭に入れながらだ。

道場に入った。即ち彼の家だ。そこに入るとだ。

「猛よ」

「あつ、父さん」

「雅からいい加減一本取れないのか」

こう我が子に問うてきたのである。

「どうなのだ、それは」  
「うっん、とりあえずはね」  
「こう返す我が子だった。応えながら着替え室に入る。」  
「やってみるから」  
「一本取れるんだな」  
「だからやってみるよ」  
「やってみるのか」  
「思うところがあるから」  
「父に対して答える。」  
「それやってみるよ」  
「一本取ればだ」  
「ここで父はついつい言ってしまった。その厳しい顔でだ。」  
「御前達はな」  
「僕達？」  
その言葉にだ。猛も顔を向けた。何だという顔でだ。  
「僕達って？」  
「あっ、いや」  
失言に気付いた。それで慌てて取り繕うのだった。  
「何でもない」  
「そっなんだ」  
「そっだ、何でもない」  
「こう我が子に返す。」

## 第六章

「気にするな」

「気にしなくていいんだね」

「それでだが」

父は話題を変えてだ。そうしての言葉だった。

「今度こそ雅にな」

「勝つていうんだね」

「子供の頃から一度も勝っていないかったな」

「一本も取ってないけれどね」

それは子供の頃からだった。本当に雅には全く勝っていないのだ。つた。

だがそれでもだ。彼はここで言うのであった。

「けれど。今日はね」

「取るんだな」

「とりあえずやってみるよ」

こうしてだった。猛はまずは剣道着に着替え準備体操と素振りドウオーミングアップをした。そうしてそのうえでだ。少し遅れて道場に来た雅と対するのだった。

「今日こそは」

「勝つていうのね」

「やってみるよ」

こう雅に話すのだった。

「一本取るから」

「わかったわ。それじゃあ道場でもね」

「勝負。しよう」

二人で言つてだ。そうしてだった。

二人はまた勝負をする。だがここでもだった。

猛は雅に手も足も出ない。とにかく徹底的に打ちまくられる。道

場の門下生達はそれを見て呆れながら言うのであった。

「今日もな」

「全く駄目だな」

「猛さんも強いんだがな」

「雅さん強過ぎるからな」

「もうすぐ免許皆伝なんだから？」

「向こうの方が先にそうなりそうだな」

雅の方である。そしてそれはだ。

道場の主である猛の父もだ。言うのであった。

「素質は雅の方が上だ」

「やっぱりそうですよね」

「雅さんはちよっと」

「圧倒的ですよ」

「速さも力も技も」

つまりどれもである。

「全国大会優勝ですし」

「それだけのものがありますね」

「やはり」

「しかし。猛も全国大会までいつている」

父として以上にだ。公平に見て話すのだった。

「いいところまでな。実力はあるからな」

「決して弱くはないですね」

「それはその通りです」

「だからやれる筈だ」

これもまた公平に見ての言葉だった。

「必ずな。特に」

「特に」

「特にといいますと」

「真剣を使うと猛の方が上だ」

その場合はだというのである。彼の方がだとだ。

「それを思い出せば。そこからだ」

「猛さんもですね」

「やれますね」

「できる。必ずな」

こうだ。二人の勝負を見ながら弟子達に話すのだった。

雅は相変わらず攻め続けている。だがその中でだ。猛はクラスメイトとの話を思い出していた。そうしてなのだった。

「真剣だよな」

このことを思い出すのだった。直心影流は真剣をよく使う。実際に竹等を斬ってみてそこから真の剣の使い方を学ぶのである。

彼もまたそれをしてきた。それを思い出してであった。

「ここは」

自分を打ち続ける雅を見る。確かに強い。

だが今は何とか一本を取られずに済んでいる。実は彼は雅相手にあまり一本は取られてはいない。実力差はそこまでは開いていないのだ。

防いだりかわしたりしながらだ。彼は見ていた。

雅は一直線に攻めてくる。その中心線を見たのだった。

「あそこを」

見てだ。彼は心の中で呟いた。

そしてだ。中段に構えた。

すつと一步出る。竹刀を持っているつもりはなかった。真剣を持っているつもりでだ。一步摺り足で前に出て。そこからは一瞬であった。

面を繰り出す。流れる様な動きで。するとだった。

## 第七章

その面は見事に決まった。まるでモノクロの無声映画の如くに静かに、だが確実に決まった。審判を務めている門下生が言った。

「一本！」

「やった……」

雅と交差してからだ。猛は言った。

「やっと、雅から一本取ったんだ」

このことが何よりも嬉しかった。腹を括った介があつたと思つた。そしてここで道場の稽古が終わつた。稽古の後の黙想と礼が終わつてからだ。

雅はだ。面と小手を外してまだ胴と垂れは着けているその姿で猛の前に来てだ。こつ告げるのだった。

「今夜ね」

「何かあるの？」

「お風呂入って部屋でいて」

こつ彼に告げるのだった。

「猛の部屋に」

「僕の部屋って？」

「話したいことがあるから」

静かな口調で彼に話してきていた。

「だから。いいわね」

「そりゃ稽古の後だしお風呂に入るし」

猛は当然といった口調で雅に返した。

「僕の部屋にいるのは当たり前じゃないかな」

「私もお風呂に入つてすぐに行くから」

実は二人の家は隣同士だ。親同士が兄妹の関係で自然とそうなったのだ。

「いいわね」

「断る選択肢は？」

「絶対に許さないから」

有無を言わせぬ口調であった。

「それはね」

「駄目なんだ」

「とにかくすぐに行くから」

表情は冷静だが何処か焦っている感じの雅だった。

「待ってて」

「お風呂に入ってね」

「そう」

こうしてだった。猛は風呂に入って寝巻きである青いジャージに着替えて自分の部屋で雅を待った。とりあえずテレビゲームをしていた。

「一体何なのかな」

ゲームのコントローラーをいじりながら考えるのだった。やってるのはPSPのゲームだ。

「雅、かなり強引だったけれど」

ゲームをしながら呟く。

「何なのかなあ。何するんだろ」

全く見当がつかずぼんやりとゲームをしていた。するとだった。扉からだ。ノックする音が聞こえてきた。

その音でだ。彼はすぐにわかった。だが扉の方に顔を向けて告げた。これは礼儀であった。

「はい？」

「御免なさい」

雅の声だった。まずはこう言ってきたのだ。

「入っていいかしら」

「うん、いいよ」

自分から言ってきたのにどうも他人行儀だと思いながらも。猛は彼女の言葉を受け入れた。そうするとであった。

扉が開いてだ。廊下の灯りと一緒に雅が入って来た。見ると。

髪型はいつもの長い黒髪を後ろで束ねたものだ。しかしだった。

服装はだ。いつもの学校の制服でも剣道着でも雅が普段よく着ているズボンでもロングスカートでもなかった。それは。

「えっ、何でなの!？」

「何でなのって」

「だから何でなんだよその格好」

こう雅に言うのだった。何と彼女は寝巻きだった。

淡い水色の日本の着物の寝巻きだ。腰には紺色の帯がある。雅は寝る時はそうした服なのである。これは子供の頃からだ。

猛は子供の頃よく雅と一緒に同じ布団で寝た。だからこのことは知っていた。しかしなのだった。今は事情が違っていたのだ。

「ええと、その格好で家まで」

「来たわ」

「そりゃ家はお隣同士だけれど」

「まずかったかしら」

「いや、もう夜だし」

部屋に入って来る雅に戸惑いながら話していく。

「誰もいないし暗がりで見えないし」

「躊躇したけれどそれでも」

「その服でここまで来たんだ」

「そうなの」

「うっん、何か凄いね」

「どうしても来たかったから」

こんなことも言ってきた雅だった。

「だから」

「どうしてもって?」

「あの」

雅は既に完全に部屋の中に入っている。そのうえで後ろ手で扉を閉めてだ。猛に対してあらためて言ってきたのだった。

## 第八章

「鍵だけれど」

「鍵って？」

「お部屋の鍵。閉めていいかしら」

「こう言ってきたのだ。」

「今から」

「閉めるって」

「誰が入ってきたらいけないから」

「そこまで聞いてだ。これまで戸惑ってばかりだった。猛もだ。ようやくわかってきたのだった。」

「それでだ。彼は雅に問い返した。」

「まさかそれで」

「詳しいことは後で話すから」

「雅はこう言っただ。猛が言う前にもう部屋の扉の鍵を閉めてしまった。するとガチャリ、という金属の音が鳴った。この音が知らせだった。」

「これでいいわね」

「あのさ、まさか」

「私から一本取ったから」

「言いながらだ。猛の方に近付いてきた。その二人の横には。」

「ゲーム止めてね。それで」

「そつちに」

「丁度お布団があるから」

「無論猛が寝る為の布団である。彼の部屋は畳なのだ。今は座布団の上に座ってそのうえでゲームをしていたのだ。そこに雅が来たのだ。」

「そこで」

「そつだね。じゃあ」

雅は猛の布団のところに来ると腰を下ろした。そこに猛が来る。雅の動きがここで急に強張ってきた。それで彼に囁いてきた。

「あの、私」

「まさか」

「ええ、こういうことはじめてだから」

暗がりの中でもだった。顔が赤くなっているのがわかった。

「だから」

「僕もだけれど」

「そうだったの」

「うん、けれど」

それでもだった。知識はあった。それに従い何とか動きながら。そうしてそのうえで雅の上に覆い被さる様になって告げた。

「僕でいいんだよね」

「ええ。猛だから」

こう告げてだった。全てが決まったのだった。

その後でだ。二人は布団の中にいた。乱れた服をかるうじてなおした姿でだ。布団の中にいてそうして話をするのだった。

「それでだけれど」

「それで？」

「何で今夜ここに来たのかな」

こう雅に尋ねるのだった。自分の横で向かい合って寝ている彼女にだ。

「それで」

「実はね。叔父様に言われていたの」

「父さんに？」

「ええ。猛が私から一本取れたらね」

「一本取れたら？」

「私の好きなようにしていいって」

そう言われていたというのだ。

「猛とのことをね」

「僕のとて」

「猛。ここの道場継ぐわよね」

雅は今度はこう言ってきた。

「それで私も言われてたの」

「雅もつて」

話が見えずだ。どうもぼんやりと返す猛だった。今雅としたこともまだよく把握できていなかった。夢の様に思っていたのだ。

「好きなようにしていいって言われてたんだ」

「私も道場を継げって言われてたの」

「ここでだ。雅はこう猛に話した。」

「つまり。私と猛で」

「二人で道場を」

「けれど猛私から一本も取ったことなかったわよね」

彼の顔をじつと見詰めて。そのうえでの言葉だった。

「そんなのじゃ流石に話にならないって。道場を継ぐには」

「だから僕に一本取れって言ったんだ」

「そうだったの。それで私から一本取ったから」

「そういうことだったんだ」

「私、ここに来たの」

「じゃあ僕とこれからも」

「宜しくね」

熱い声と目での言葉だった。

「これからも。ずっとね」

「うん、こちらこそね」

笑顔で言い合う二人だった。そうして。

## 第九章

「もう少ししたらバレンタインだけれどね」

「あつ、そうだったね」

「楽しみにしてて」

雅は猛をじつと見て告げた。

「腕によりをかけて作るから」

「うん、わかったよ」

「バレンタインもあれよ」

そしてだ。雅はここでこう言うのだった。

「一本取ってないかね」

「なかつたんだね」

「そう。けれど一本取ったから」

それでだというのだった。雅にとっても嬉しい一本だったのである。

二月十四日。猛は満面の笑顔でいた。そのうえでだった。

彼は自分の席であるものを実に美味しそうに食べている。その彼を見てだ。クラスメイトはわざわざ彼の席のところに自分の椅子を持って来て座ってだ。こう言うのであった。

「滅茶苦茶幸せそうだな」

「うん、これ雅が作ったチョコレートなんだ」

「彼女の手作りかよ」

「彼女じゃないよ」

猛はそれをすぐに否定した。そしてこう返すのだった。

「許婚だよ」

「そうだったのかよ」

「うん、目出度くね」

「じゃあ余計にいいのかよ」

「これも花嫁修業って言うてね」

にこにことしながら言うのだった。言いながらその箱の中のチョコレートを食べていく。一粒一粒に様々なラッピングがされている。「それでなんだ」

「美味いか」

「こんな美味しいチョコレート食べたことないよ」

「これが猛の今の返答だった。」

「いや、本当にね」

「そうか。よかったな」

「うん、僕今最高に幸せだから」

「ったくよ、何でこんなに幸せな奴がいるんだよ」

クラスメイトは苦笑いを浮かべてぼやいた。

「世間様ってのは不公平だよな」

「けれどさ。こうなるまではさ」

「ぼこぼこにやられてたんだな」

「だから雅だよ」

彼女だからだというのであった。

「雅から一本取るのって」

「全国大会優勝からはかよ」

「凄く難しかったからさ」

「それがあってこそってんだな」

「そういうこと。それで許婚になったし」

その一本取った結果であるのは言うまでもない。

「いやあ、本当によかったよ」

「それでな」

クラスメイトは暑いと思いつつも猛にさらに問うた。

「そのチョコレート美味いんだよな」

「こんな美味しいチョコレート他にないよ。さっきも言ったけれど」

「そうか、そんなにか」

「雅って料理も凄いなだよ」

話のろけに向かう。どうしてもだった。

「もうそれがね」

「それはよかったな」

そんな話をしているとであった。ここぞだ。

クラスに雅が入ってきた。そのうえで猛のところに来て言うのであった。

「どう？チヨコレート美味しい？」

「うん、とてもね」

本人にもにこにここと答える彼だった。

「有り難う、最高のチヨコレートだよ」

「そう、それならいいわ」

「じゃあお返しは」

「そんなのいいわよ」

見ればだ。雅ものろけていた。これまで誰も見たことのないようなにこやかな顔にそれがはつきりと出ていた。

「だから今夜またね」

「そうだね。今夜マシユマロ持って雅の部屋に行くから」

「だからそんなのいいわよ」

「いいよ、折角だし」

そんな話をする二人だった。クラスメイトはここで二人の顔を見る。そうしてあることに気付いたのだった。

「全くな、脂の抜け切りたいいい顔してるよ」

「えっ、脂!？」

「脂って!？」

二人は彼の言葉にきよとんとした顔になって返す。顔をそれぞれ彼に向けてきたのだ。

「どうしたの、一体」

「脂はチヨコレートには使わないけれど」

「わからなかったらいいよ」

二人のその、明らかに剣道以外のことでそうなっている顔を見ての言葉だった。

「しかし。冬だつてのに」

クラスメイトはそんな二人を見てだ。まだ咳くのだった。

「暑いな。これはまた」

「じゃあ今夜またね」

「うん、剣道してそれからね」

にこにことして話す二人だった。今の二人の前には雪もチョコレートも。何もかもが溶けてしまいそうであつた。そんな二人であつた。

燃えよバレンタイン 完

2011・1・13

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9163q/>

---

燃えよバレンタイン

2011年2月14日14時55分発行